

「教会の始まり」（使徒言行録 2 章 1-18 節）

1 新しい時の始まり

今日はペンテコステの礼拝です。ペンテコステは教会が、クリスマス、イースターと並んで長く大切にしてきた祭り、記念日です。

ペンテコステとは五十番目、五十日目という意味です。イエス・キリストの復活の日から数えて五十日目の日、今日の聖書箇所にあるように聖霊がくだり使徒たちが伝道を開始した、教会の始まり・誕生の出来事として今日まで覚えられてきました。ペンテコステは日本語では「五旬祭」とか「聖霊降臨祭」とも呼ばれています。教会の外では、とくに日本では、クリスマス（降誕祭）やイースター（復活祭）ほどは知られていません。

おどろおどろしいという言葉がありますが、今日の箇所には、まさに耳目を驚かす描写で聖霊の降臨が描かれています。こうしたことからの出来事が何か突然、不意に、予期せず起こったように私どもは想像しがちですが、決してそうではありません。福音書から使徒言行録一章をへてさらにこの 2 章へ読み進んでいくと、弟子たち（使徒たち）はすでに聖霊を受けるという約束を与えられており、それがこういう仕方で実現した、つまりこれは神の救いの計画の重要な前進、一つのステップを刻んだ出来事だったということが分かります。イエス・キリストは生前最後の説教（ヨハネ福音書 14 章）で、弟子たちに（あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる）聖霊をわたしの名によって送ってくださいよう父（なる神）にお願いしようと言っています。また復活し弟子たちの間に現れたイエスはすでにそこで「聖霊を受けなさい」（同 20 章 22 節）と語っています。また使徒言行録一章ではキリストが天に帰るその直前、同じく弟子たちに、エルサレムを離れないでいるように申し渡し「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そしてエルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また地の果てに至るまでわたしの証人となる」と語っています。そうした約束が実現します。主の証人としての教会の歩みが始まります。

いま私は、イエス・キリストのご自身の約束の実現、神の救いの計画の前進というイエスと教会のいわば連続性ということを申し上げました。しかしこのペンテコステの出来事を前に私どもが思い起こしておくべきことはそれだけではなく、もう一つの側面、イエスはもう地上にはおられないという非連続の側面です。目で見、耳で聞き、手で触れることができる方としてはおられない。ものがここにあるとか、私がここにいるとか私どもは申します。しかしそういう意味でイエス・キリストはどこにもおられないのです。イエス・キリストがおられない時間が始まった。イエス・キリストの昇天がその区切りです。ただししかしこのイエスのおられないということ、もう少しはつきり理解しておきたいと思えます。というのもイエスの昇天にさいして天使の声がこう響いたと書いてあるからです。「天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ

有様で、またおいでになる」(使徒一章二節)。また、おいでになる。この地上におられず天におられる方が、またおいでになる。一度来られた方がまたおいでになる、この二つの到来に挟まれた時間、現在というのはそういう時間です。いつおいでになるか私どもは知りません。それはいつおいでになってもよいという意味でもあります。終わることがいつも可能な時間が始まった、こうした時間を私どもは生きています。しかしこうした時間の中で、私どもは孤独に捨て置かれているではありません。イエス・キリストに代わって聖霊が私どもと共におられるからです。こう言ってもよい。その霊と共にイエス・キリストはいまも私どもと共におられると。聖霊は神から遣わされたイエス・キリストの霊です。私どもにとどまる霊です。私どもの心の内に働く霊です。イエス・キリストの霊ですから、御言葉とともに働く霊です。イエス・キリストの霊ですから教会の主としての霊です。イエス・キリストの霊ですから諸霊に打ち勝つ霊です。この聖霊が、終わりの時を目指し主の証人として歩む私どもの群れを導き、支え、慰め、そして力づけます。ペンテコステはそのような時の始まりを告げる出来事です。

2 証しする教会

さてイエス・キリストを天に見送ったあとのエルサレムには、二人の使徒(イスカリオテのユダはいない)を中心に、百二十人ばかりの集団ができていました。それが後に教会に成長していきます。彼らがユダヤ教の収穫祭でもある五旬祭に集まっていたとき聖霊降臨の出来事は起こりました。

突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに「彼らに」現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、霊が「彼らに」語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出した(24節)。

ここで起こったこと、その全体はただ想像する以外にないのですが、上から下への流れ、線のようなものがあることに私どもは注意したいと思います。この現象の始まりは「激しい風が吹いてくるような音^{エコー}」です。この音が「天から聞こえ」てきたということです。そこから聞こえてきた。霊の出所がイエス・キリストにあることが暗示されています。

その行き先はどこでしょうか。分かれ分かれに現れた炎のような舌、それはどこに向かったのでしょうか。「一人一人の上にとどまった」。ここで起こったのは集団狂騒ではないのです。最終の行き先が「一人一人」です。「分かれ分かれに」に注意したいと思います。「一人一人」が問題になっているのです。百二十人ばかりの中心にいたリーダー格のペトロだけではない。すべての人、です。一人一人に、です。聖霊が下された、一人一人の心に聖霊はとどまったのです。この出来事の直後ペトロは立

ち上がって説教し、預言者ヨエルの言葉を引いて説明しています。「神は言われる、終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。わたしの僕やはしためにも、そのときには、わたしの霊を注ぐ」(17-18節)。すべての人、一人一人に、です。イエス・キリストはいまさない。それまでとは違う新しい時が始まっています。しかしイエス・キリストはこの新しい時もその霊において私ども一人一人と共にいます。世の終わりまで共にいます。それがこの不思議な出来事を通して始まったのです。

「一人一人の上にとどまった」ことの帰結にも注意しなければなりません。「霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出した」。このことは聖霊をいただいた私どもが何のために聖霊にあずかるのかを明らかにしています。福音の証人として用いられるためです。むしろその目的のために聖霊をいただいたと言ったほうがよいかも知れません。百二十人ほどの集団、彼らはみなユダヤ人であり、ほとんどがガリラヤ出身であったようです。みんながインテリだったわけでもむしろん全くありません。その彼らが、彼らのふだん使っているのは違う「ほかの国々の言葉で」語り出したというのです。酔っ払って適当なことを口にしていてというのではないことは、ペトロが、いまは朝の〇時だと言って弁明している通りです。周りに大勢の人が集まってきました。五旬祭の巡礼でエルサレム神殿を目指して各地からユダヤ人が集まり、ごつたがえしていました。たくさん地名が出て来ます。エルサレムを中心として、アフリカ北部を含む地中海東部のほぼ全域です。大都市もありますし、今ではよく分からない地方もあるようです。本当のところ何が起こったのでしょうか。

ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞くことは、人々はみな、驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った(11-12節)。

重要なことは、霊に満たされて他国の言葉で語り出した者たちの言葉が、そこに集まってきた人たちに「自分の故郷の言葉が話されている」(9節)と思わせただけではなく、彼らの語ることが「神の偉大な業を語っている」言葉として聞かれたということです。神を証しする、神の救いを語る言葉として聞かれたということです。そのことを神の側からこう言い直してもよいでしょう。そのような人間の言葉が神の証しに用いられた、それを神がお許しになったと。人間が神のことを語ることが許され、証しとして聞かれるということです。ここに教会が誕生したのです。宣教と証しする教会が生まれたということです。むしろ証しはただ語ることによってだけでなく行うことによってもなされます。ただ在ることを通してもなされます。しかし何よりも語ることを通して、言葉によって証しがなされる、神のことが、イエス・キリストその人とこの方によって成し遂げられた救いのことが宣べ伝えられます。宣べ伝えを使命とする教会が生まれたのです。

3 結ぶ力

人の言葉が神の言葉として人に届くということ、ここに聖霊の働きがあります。聖霊は結びつける力です。神と人とを結びつけます。また神の言葉を介して人と人とを結びつけます。

昔ドイツのレッシング(1729-81)という文学者・思想家がイエスの時代のこととわれわれの時代のこととのあいだにある隔たりを嘆いて「醜悪な溝みなぞ」と呼んだことがあります。私ども人間のあいだにもそうした醜悪な溝が生じます。しかしこの世のあらゆる隔たりも、天と地とのあいだの隔たりを越えるものはありません。神と人とのあいだの隔たり以上のものはない。しかしこの神と人、天と地という、これ以上ない隔たりを結びつけた、イエス・キリストにおいて結びつけた力が聖霊です。聖霊は結びつける神の力です。そうであれば私どもが世にあつて、聖霊によっても架橋できない、結びつけられない関係はないと言わなければなりません。人と人との関係、近い関係でも、時にもものすごく遠い関係になります。親子でも、友人同士でも、夫婦でも、近い関係が近い関係であるがゆえにくずれます。聖霊の信仰の順番です。結びつけ和解させ共に生きるようにさせる神、これが聖霊なる神です。

旧約聖書のエゼキエル書に次のような聖句があります。ペンテコステに関係するみ言葉です。「わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。・・・お前たちはわたしの民となり、わたしはお前たちの神となる」(36章26節以下)。教会が「イスラエルに代わってではなく」イスラエルと共に神の民となるのは、私どもの中に、私どもの教会に、そして私ども一人一人に「新しい心」「新しい霊」が与えられるからです。私どもを聖霊が支配します。聖霊によって支配された人間としての心、それが肉の心です。パウロはローマの信徒への手紙でそれを「文字に従う古い生き方ではなく、霊に従う新しい生き方」(7章6節)と言っています。この生き方へ向けて私どもは信仰を告白し洗礼を受けるのです。しかし聖霊によらなければ「イエスは主である」(1コリント12章3節)と言うことも私どもはできないのです。信仰へ導かれる背後には聖霊の執り成しがあります。私どもはふだんの生活で重力を意識することはありません。でも立っているというのは重力のおかげです。私どもはたしかに生きている、それは命を付与する霊によって生かされているということです。キリスト者として生きることを許されている、それは聖霊のおかげです。ガラテヤ書でパウロは「霊の結ぶ実」を列挙しその最初に「愛」を挙げています(5章22節)。愛も結ぶ力です。対立を超えて向こう側へと私どもを運んでいく力です。私どもにとつて、今日の世界がもつとも必要しているのは、私どもを他へと向かわせ、世界へと向かわせ、そして結びつける力です。聖霊の力です。この力が私どもにすでに与えられていることを今日から始まる歩みの中で知ることができるよう祈りたいと思います。

(2018年5月20日)